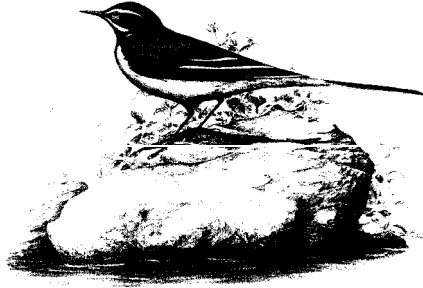


いしたたき



— イシタタキ —

この鳥は主に河川周辺に棲んでいて、いつも尻尾を上下に振るので「イシタタキ」と呼ばれるのです。正確には、セキレイ科の鳥です。日田では普通、ハクセキレイ・セグロセキレイ・キセキレイの3種類が見られます。それぞれ、体の色で区別しています。このうち市内で周年見られるのはセグロセキレイとキセキレイですので、「イシタタキ」とは、この2種類をさすことばです。

特定非営利活動法人（NPO）取得に向け 設立総会を開催

私たち、ひた水環境ネットワークセンターは設立以来、活動を始めて今年で10周年を迎えることになりました。これを機会にNPO法人格を取得し活動を広げて行こうと、去る6月6日（木）に、NPOの設立総会が開催されました。

それまでの経緯としては、昨年度第2回の懇談会において、「NPOを取得したらどうか？」という意見が出され、NPO取得検討委員会を発足。会員によるアンケートを行い、反対意見もありましたが、「形よりも中身で！」といった意見で、結果として賛成意見の方が多く、昨年暮の総会にお

いて検討した結果、NPO法人取得の方向で進めていくということが決まりました。検討委員会も、NPO取得準備委員会と名を変え、設立総会へと至りました。

議案として、申請に関する各事項の承認を行い、新役員も承認されました。

NPO 法人取得に伴い、これから新たな1歩を踏み出すこととなりますが、これからも、「子ども達に泳げる川を！」のスローガンのもと、水郷日田復活の目的を達成するために、皆さまとがんばって行きたいと思っておりますので、よろしくご支援の程お願い致します。

新役員に以下の方々を選出しました。（敬称略）

理事長 諫本 憲司 （前ひた水環境ネットワークセンター座長（第4代）
（「三隈川の水量増加」推進実行委員会・事務局長）
（筑後川河川モニター）（日田青年会議所OB）



いしたたきは、環境保護の為、再生紙を使用しています。



| | | |
|------|-------|--|
| 副理事長 | 安元源之介 | (三隈川清流を戻す会・会長) (前ひた水環境ネットワークセンター副座長) |
| 〃 | 甲斐 美徳 | (ローカルエネルギー研究会・代表) (前ひた水環境ネットワークセンター副座長) (ひた市民環境会議「エネルギー部会」・部長) |
| 〃 | 小ヶ内聡行 | (元ひた水環境ネットワークセンター代表) (日田青年会議所OB) |
| 〃 | 佐々木美徳 | (日田青年会議所・理事長) (前ひた水環境ネットワークセンター代表) |
| 理事 | 財津 忠幸 | (NPO 筑後川流域連携倶楽部・副理事長) (「水の森」の会・事務局長)(森林インストラクター) |
| 〃 | 成毛 克美 | (日田市民セミナー・代表) (ひた水環境ネットワークセンター・第2代座長) (筑後川まるごと博物館・事務局長) (NPO 筑後川流域連携倶楽部・理事) |
| 〃 | 本松 民子 | (洗剤公害をなくす会・代表) (洗濯キャラバン・アドバイザー) (日田子ども劇場・副運営委員長) |
| 〃 | 諫山 司 | (三隈川・大山川河川環境協議会・幹事) (日田青年会議所OB) |
| 〃 | 安岡 英次 | (リバーフェスタinみくま川実行委員会・事務局) (日田青年会議所OB) |
| 〃 | 藤田 公昭 | (日田青年会議所・担当副理事長) (ひた市民環境会議「水と森部会」・部長) |
| 〃 | 園田 匠 | (日田青年会議所環境委員会・委員長) (ひた水環境ネットワークセンター・事務局長) |
| 監事 | 佐藤 仁蔵 | (郷土日田の自然調査会・会長) (豊後自然塾・塾頭) |
| 〃 | 高倉 智行 | (元ひた水環境ネットワークセンター代表) (日田青年会議所OB) |
| 顧問 | 小野 孝 | (ひた水環境ネットワークセンター・初代座長) (日田市立博物館協議会・会長) (日田市環境審議会・会長) (元大分県環境アドバイザー) |
| 〃 | 石丸 邦夫 | (ひた水環境ネットワークセンター・第3代座長) (日田市観光協会・会長) (「豆田地域」夢作り委員会・代表) (久津媛と日田の古代を語る会・幹事長) |





～故広松伝氏・追悼1～

映画「柳川掘割物語」のこと

ひた水環境ネットワークセンター 甲斐美德

広松さんの名前を初めて知ったのは、1987年8月20日付け大分合同新聞に載っていた宮本憲一・大阪市立大学教授（地域経済論）の「柳川水郷再生の教訓」という文章によってでした。「高畑勲監督『柳川掘割物語』の試写を見て、心が震える感動を受けた。ここには、日本の地方都市をよみがえらせる処方箋が見事に描かれている。」という書き出しで始まるそのエッセイの中で、市役所の一担当係長であった広松さんが全市民を巻き込んで掘割の浄化再生を果たしていった実績が詳しく紹介されていました。

当時の私は大分県日田事務所（現在の日田地方振興局）で豊の国づくり塾などの地域振興を担当する一方、私生活では「日田よい映画を見る会」の事務局長をしており、公私両面での関心から、この映画をぜひ日田で上映したいと思うようになりました。ちょうど、豊の国づくり日田塾の第2期生が2年目の実践活動課程にはいっており、「川」を活動テーマとして掲げていたことから、塾の活動としてこの映画の上映会を開催することを提案し、この年の11月に日田市文化センターで昼夜2回の上映を行いました。

残念ながら宣伝不足のせいもあって、この時見に来てくれた人は少なかったのですが、大分県内ではこれが初めての上映であり、その後、大分市や中津市や湯布院町でも自主上映会が持たれ、その地の川を守る運動へと発展していきました。日田市ではその後、1989年の筑後川フェスティバルの折にもこの映画の上映を受け持つことになり、中ノ島の老人福祉センターを会場にして上映しました。解説のために来られて

いた坂本紘二先生とはこの時が初めての出会いでした。

その翌年、大分県下の豊の国づくり熟成が一同に会する交流大会が日田市で開催され、実行委員会を組織した日田塾2期生が講師として招いた広松さんと、私は初めてお会いすることが出来ました。その前年に西日本新聞社が企画した筑後川懸賞論文に、私は「小規模分散型システムの先駆モデルとしての筑後川水系の可能性」という題の長い論文を応募して2位に入賞し、賞金5万円をいただいております。広松さんは、その時の審査員として私の論文を読んでくださっており、「審査会で私はあなたの論文を1位に推薦した」と激賞していただき、大層感激いたしました。

宮崎駿(製作)、高畑勲(監督)という日本アニメーション界の最高権威の御二方にとっても、この映画は唯一の実写作品として特別な思いがあるのでしょうか。広松さんのお通夜の会場で、スタジオジブリから、そして宮崎・高畑両氏からの供花は、ひととき目を引くものでした。私にとっても、一地方公務員にここまでことがやれるという事実、ダムによらない利水・治水システム、循環によるエントロピー(汚れ)の浄化という資源環境問題の根本原理を提示したこの映画との出会いは、大きなカルチャーショックでした。

環境の保全と再生、そして住民参加。改正河川法の理念を20年以上も前に見をもって実践で示した広松伝さんの業績を正確に伝えるためにも、映画「柳川掘割物語」がこれからひとりでも多くの人に見られることを願ってやみません。



～故**広松伝氏**・追悼 2～

「広松 伝さんは、水環境活動の原点」

ひた水環境ネットワークセンター

諫本 憲司

先日、広松さんの突然の訃報を聞いて、耳を疑いました。

去年から今年のはじめにかけて、あちこちで広松さんにご一緒する機会が多く、今年の2月3日には、ひた水環境ネットワークセンター設立10周年の記念シンポジウム「よみがえれ、水郷ひた」でパネラーをお願いし、穏やかながら情熱のある広松さん独特のお話をお聞きしたところでした。最近の広松さんが人に伝えたかったことの 하나가、有明海の実情で、海苔の色落ちやたいらぎの死滅などについての報道とは違う真実のことでした。そのシンポジウムでは時間がなかったので、別の機会にでもと思っていたのですが、直接お話を伺うことができなくなってしまいました。(この話については、広松さんの著書「よみがえれ“宝の海”有明海」に詳しく書かれています。)

私が広松さんに最初に出会ったのは、平成元年5月に柳川で開かれた「水郷水都全国大会」の場で、広松さんの自宅の石井式合併浄化槽を見学したときでした。広松さんは、その排水を飲んだり飲んでみないかとすすめてくれたり、暑い日でしたが汗をかきながら一生懸命説明して下さいました。

私はそのころ青年会議所3年目で、まちづくり関係の委員長をはじめてうけて、水環境の問題に取り組もうとしていたときでした。個人的に環境問題に関心を持ち、世の中の何かがおかしいと思い始めていたころでしたが、水に関しては、何をどうしたらいいのか分からずいろいろ模索していた時期だったので、この会議は私にとって問題点を明らかにし、水環境に関する活動の原点となりました。また、この会議を参考にして、その年の10月に日田郡市水環境会議を開くことができ、これによって、その後の活動の方向も見出せたし、現在につながっていると思います。この時も、広松さんをはじめ、久留米の方々にたくさん来ていただきました。今思えば、このころから、水環境に関しての民間の交流が活発になってきたような気がします。

このように、私にとって、広松さんは水環境活動の原点ですが、今でも一番に目に浮かぶのは、日本酒の大好きな広松さんです。この話は、長くなるので書きませんが、お世話になった広松さんに少しでも恩返しできるよう、今後も水環境に関して活動を続けていきたいと思えます。ご冥福をお祈り申し上げます。



～故**広松伝**氏・追悼3～

「広松伝さんを想う」

ひた水環境ネットワークセンター 安岡英次

広松さんと最後にお会いしたのは2月3日の文化センターでのシンポジウムの時だったと思いますが、いつもの朴訥とした普段通りの広松さんだっただけに訃報を聞いた時は本当に驚きました。これまで水環境交流会などで何度もお会いしていますが、いつも多くを語らず、感情を前に出さず物静かな語り口で山から川そして海へと流れる水の循環の大切さなどを突々とお話されていた事を思い出します。

特に私が思い出深いのは、平成4年ひた水環境ネットワークセンターの設立の際お世話になった事です。2年越しの大アンケート調査を行い環境問題に取り組む事になったJCは、4～5年かけて多くの交流を経て環境問題に関心を持つ団体や個人の組織化の必要を考える様になりました。当時10名程度で発起人会議を行って行く際、組織をつくるための参考となるところを探しました。柳川に「水の会」というのがあると聞いてまず電話をしたのが広松さんでした。忙しい方といった印象が

強く、いつも奥様が出られていた気がします。何度目かで広松さんと話ができ、水の会の事をいろいろ教えていただいたり当時の事務局の立花さんを紹介してもらったりして会則や発行紙を頂きました。それをもとにネットワークセンターの会則が作られ設立の運びとなりました。いわば広松さんはネットワークセンターの生みの親といっても過言ではないでしょう。

水の会が住民参加の河川浄化に取り組んだり、地域の良さを知るために流域独自の文化を学ぼうとしていたように、その頃から日田や他地域でも図られたように連携型の川作りに多くの方々が参加しはじめていた感じがします。広松さんを始めとした様々な人達のお陰で、ネットワークセンターもNPO法人化にこぎつけ当初の目的のひとつである筑後川の上中流域の核になりつつあります。広松さん本当にありがとうございました、心よりご冥福をお祈り致します。

写真は、

平成7年9月16日

第3回

九州水環境ネットワーク

交流会 in 日田に参加し、

三隈川の遊船での懇親会で

挨拶をする広松伝さんです。



～故広松伝氏・追悼4～

「シャコのこと」

ひた水環境ネットワークセンター 諫山 司

大きな風呂敷づつみをぶら下げて、いつものように温厚な笑顔で来られた。7年前の第3回九州水環境ネット交流会のメイン、船上懇親会でのことである。もちろん、風呂敷包みの中のミカン箱ほどあるプラスチック容器の中身は、朝、有明海で取れたシャコであった。以前、ことといの里での水環境セミナーで味をしめていた私たちは、量的にも、味的にもその日一番の手土産にひそかに喜んでいて。当のご本人は、遊船の後ろと後ろをくっつけて二艘だてにした船の真ん中で、うれしそうにみんなにシャコを振る舞っておられた。そして、ゆっくりと船上から夜の三隈川を眺めながら、これまたにこにこみんなの話に耳を傾け、他の人の持ってきた地酒を口にされていた。

今考えてみると、あのシャコには大きな意味があったと思う。当時、全国水環境の代表幹事をされていた広松さんは、あまり意識されていなかったと思うが、地元の心づくしのお土産こそが交流会を盛り上げ、同じ水環境保全を志すものの会話を近づけていたのではなかろうか。また、急激に汚染の進

んだ有明海では、もうあのシャコは食べられないかもしれない。きっと全国水環境交流会にも、広松さんはあのシャコを持参されていたのではなかろうか。

私が特別食いしん坊だからかもしれないが、九州交流会で思い出すのは、その後柳川であった交流会での地元エツの刺身、天明水の会会長、浜チャンの持ってきたエビ、佐賀の於保さんが出したざる豆腐、そして水環境ネット東北の地酒など、懇親会での持参品のことばかりである。第2回の緑川での交流会で、山田原の生産者の名前の入った日田スイカ2個ぶら下げて行って、あまりにもみんなに受けたので、気をよくして「来年の夏は是非、日田のスイカを食べに来てください。」と言ってしまったのが、日田での第3回交流会の始まりだったような気がする。

広松さんの船で有明海のスズキを釣りに行き、スズキの洗いを食べさせていただくと言うお願いは、ついに実現できなかった。只々、川が本当に好きな偉大なる先輩のご冥福を祈るばかりである。

洗濯キャラバン ・ 各小学校の総合学習で開催！！

今年に入り、洗濯キャラバン（せっけんと合成洗剤を洗い比べる実演）に新しい依頼が入るようになりました。

今までは、市内外各地の婦人会や公民館活動での開催が中心でしたが、今年は、2月に咸宜小（5・6年生）、6月には石井小（5年生）、三

芳小（6年生）、7月に日隈小（6年生）と、各3～6時間目の2時間を利用し、初めて授業中に開催するようになりました。

子どもたちが実際に見て感じたことを、感想文集としてたくさんいただいていますので、機会があればぜひ公表してみたいと思っています。



いしたたきは、環境保護の為、再生紙を使用しています。



～故**広松伝**氏・追悼5～

広松伝さんと「筑後川まるごと博物館」

「筑後川まるごと博物館」事務局長、ひた水環境ネットワークセンター

成毛克美

今年4月15・16日、「筑後川まるごと博物館」副館長の広松さんは、駄太井館長、森名護屋城博物館長、堂前久留米大文学部長と私の5名で、第1期学芸員の面接試験を行いました。その席で、広松さんら試験委員を驚かせてのは、学芸員希望者の方々の実に多様な経験と才能、そして筑後川への思いの深さと次代の子ども達に再生した筑後川を残したいと言う情熱でした。試験を終えた時、「これで、筑後川の大きな宝が又出来ましたね。」と、心から喜んでおられた広松さんの笑顔は、今も忘れられません。その後の“飲み会”の席で、大好きな冷酒を飲みながら、今夕初孫が生まれたと嬉しそうに話され、「今日は家内が病院で、帰っても一人だから」とコンビニで買ったカップ麺を下げた帰られました。その姿が、妙に広松さんの人柄を物語っていて心に残っています。その一週間後に緊急入院され、集中治療室に入られたまま5月15日64才で亡くなられたのです。

私が、広松さん初めてお逢いしたのは「下水道革命」という本を出された1989年頃でした。下関市立大の坂本紘二さんに紹介していただいたのですが、当時の広松さんは掘割の浄化が一段落し、市内の三面コンクリート水路をはがして再生させる作業に取り組んでおられました。その後の柳川全国水郷水都会議、又1993年から始めた小野ことといの里での「水環境セミナー」と「筑後川水環境マップ」発行に対しても、広松さんは柳川から出席され、

多くの助言と協力をさせていただきました。今でも鮮明に思い出すのは、「水環境セミナー」交流会に来る折、自ら海に出、一週間以上かけて調理したクラゲ料理と、箱一杯のシャコをニコニコと差し出された広松さんの姿です。

そんな面をもった広松さんは、柳川掘割の浄化だけでなく、自ら舟を持って海に出、又20年以上前から矢部川での上下流交流や、全国水環境交流会の代表幹事として全国の水環境グループのまとめ役でもありました。そして何よりも、柳川での広松さんの取り組みが契機となって、「環境と住民参加」を軸とした河川法の改正が実現したのです。この成果が土台にあって、日田の水量増加運動や、流域全体を大きな自然の博物館とする全国初の「筑後川まるごと博物館」が生み出されたのだと言えます。昨年からはじめた学芸員養成の講座には、学生104名と一般50名が受講し、広松さんも自ら講義やフィールドワークの解説を担当され、第1期学芸員として22名（学生4名、一般18名）が育って行きました。その意味で、新学芸員の方々は広松さんが育てられた“最初で最後”の学芸員となりました。生前、有明海の汚染と水量増加にもかかわらずダム下はほとんど水が流れない夜明ダムの現状に心を痛めておられ、最後まで“水の循環の大切さを訴え続けられた広松さんの生き方を思い出す度に、筑後川再生への想いを改めて強くするこの頃です。



～故広松伝氏・追悼6～

広松さんを悼む 「森から海まで」

筑後川流域連携倶楽部・副理事長

財津忠幸

平成11年から実施している天神町千倉の「水の森」で今年も春の植林を行った。春うららかな山の風を受けて、90名からの流域の人々が木を植える様子は壮観でもある。その中であって、今年初めて広松さん率いる「柳川水の会」が遠くから10数名も参加した。

柳川市は大半が矢部川からの水を利用していることもあって、筑後川の水の恩恵を受ける人々で構成する「水の森」の会には入っていなかったが、3月に会ったときに、流域を越えて交流をしようとの話になり、今回実現した。

各団体の紹介と報告で、広松さんは例のとおりのだんとした口調で、「森と海は一体のもの」。森が病めば海は死ぬ。今、有明の海は多くの問題を抱えながらも力を合わせて再生への努力を続けている。その中の一つが森づくりであり、有明に注ぐ最大の河川「筑後川」の生き返りに手助けは当然のこと。だから日田にきました。と、そういつて仲間と真剣に木を植える姿はとっても印象的でした。

広松さんの「柳川水の会」では、10数年も前から上流森林地矢部村と柳川市の子

どもたちの植林交流を交互の続けている。山村の子どもたちが有明の海で潮干狩りや網引きであげる歓声は想像してもとてもすばらしい。

小生、森林インストラクターでもあることから、この交流に遊びにおいでと、会うたびに誘われながら、つつい延ばして一度も行けなかったことを、今にして思えば大変悔やまれる。

海を、森林を、自然を思う広松さんのひたむきさは群を抜いていた。誰にも及ばない。更には、考えていることのスケールの大きさは、我々の及ぶところではない。

「水の森」に来たときは全く元気で、数日後、こんなことになるとは思っても寄らなかった。有明の海を“宝の海”によみがえらせると熱っぽく語り、東奔西走する広松さんの姿はもう無い。残念でたまらない。我々が意思を継げるとは毛頭思わないが、力を合わせてみんなで取り組めば、何分の一かでも前進する。

矢部・柳川のこども交流に次回は是非とも参加し、森の話をしてあげたいと広松さんの慰霊に約束した。改めて広松さんのご冥福を謹んでお祈り申し上げます。





三隈川の水量増加後の環境変化について

三隈川清流を戻す会 安元源之介

私たちの水環境ネットワークセンターが後押しとなり、三隈川再生計画という名の基に市民の皆様とともに一生懸命水量増加運動に取り組み、念願の毎秒4.5t（3～9月期）増量を確保し、上流の大山ダム取水改修工事も今年の上旬に終わり3月21日より本格放流となりましたが、水質改善や鮎の豊漁という点では期待通りに至らず残念でなりません。三芳小淵地区より上流の大山川は、増水されている事が容易に見えますが、なにしろ小淵橋玖珠川合流点より下流は川幅が広がる為、以前とほとんど変わらず、目で確認

する事は困難な状態です。

この増量は、柳又発電所への導入水量（年平均30t/s弱）から考えると、ほんの一部でしか無く、俗に言う「スズメの涙」程度ではないでしょうか。真の三隈川再生計画であるならば、今後も粘り強く水量増加の運動を続けて行くしかない事を再認識し努力する以外にはないと思います。

それと上流の松原ダムの水質悪化ですが、いわゆる「死水」と言う水質問題です。今年の初春より梅雨時期にかけ全く期待はずれの水質となってしまいました。

次に上げる6点の問題点が考えられます。

- ① 3月下旬より5月上旬迄、約1ヶ月強以上毎日毎日雨の日の連続で水温の低下と上流から濁り水（ダム湖の濁泥）の流入があった事。
- ② 5月～6月期、下流井堰（筑後平野・田植え時期の農業水）へのダム試験放水（5日間で600万t、去年は3日間で300万t）により大量の水を放流した事でダム湖の底水（無酸素水）が下流域に連日流入した事。
- ③ 多目的ダムの為、梅雨時期の災害に備え、ダム湖水量を最低限迄減水（カラの状態に）したダム運用の事。
- ④ 魚類について考えますと、特に日田地方は夏期に鮎（常食としている珪藻（ケイツウ））について環境問題と特に密接な関係にあり、振り返りますと、今年は例年に無い不漁との事になったようです。
- ⑤ 森林災害復旧工事により、いたる所に林道が開通し、また、杉林が多い為、保水能力に乏しく、少しの雨でも一気に泥を押し流し急激に濁り増水する等、特に玖珠川沿線では高速道複線化工事により土壌がむき出し状態となり雨が降ると流出している。
- ⑥ 冬から春期にかけて野鳥（川鶉やサギ類等）が著しく増え放流稚鮎を大量に食用としている事。



以上のような、悪条件が重なり④の点では、特にひどい状態となっていたと思われるので7月下旬に成魚の再放流を行いました。10 数年前の夏期、福岡大洪水が起り福岡市への生活用水確保という観点から、その後下流に筑後川大堰が建設され、魚道は一応整備されましたが、まだまだ従来の自然環境には程遠く、昔のような有明海からの天然鮎に見切りをつけ、魚の安定供給確保という事で、大分県漁業公社より毎年大量の人工孵化産稚鮎(いわゆるバイオ鮎)を買い入れ、各河川に放流するようになり以前の自然鮎とは全く性質も異なり、ひ弱な魚となってしまいました。

今年特に①に述べましたように長雨で水温が上昇せず、鮎特有の冷水病が発生し、あちこちで多量に死魚が確認され、魚体にも傷跡が見られ、問題となりましたが、それに追い討ちをかけるように5月20日の鮎解禁日4日前の豪雨により上流の土砂(悪臭と黒色)が流れ込み、鮎を死に追

いやったに違いないと思われま

す。それを取り戻すためにも、下流にある夜明けダムの撤去か、もしくは開放運動を興したらいかなるものでしょうか?観光面でも大いに寄与すると思われま

す。昨今、夜明けダム直下迄は、天然鮎やうなぎ等遡上しているのが現状です。昔のように三隈川に多くの魚を泳がせたいと思います。

大山川・三隈川水量増加の記念すべき第一歩の年でしたが、このような悪条件が重なり、皆様の期待に添えなかった事が誠に残念でなりません。しかしながら、今後、水量や水質が改善されれば、ひびき鮎の復活も期待されることと思

います。私たちが最初から目標としている三隈川自然流量の二分の一確保に向け粘り強く取り組み、三隈川を元の清流の川に戻そうではありませんか!

事務局よりお知らせ

原稿大募集

この広報誌は、当センターとしての身近な情報や取り組みにとどまらず、会員のグループ紹介・会員エッセイも掲載できます。また、会員以外でも紹介したい事やお知らせしたい情報があれば掲載できますので、事務局までどしどしご連絡ください。お待ちしております。

会員大募集

当センターは、「子どもたちに泳げる川を!」をスローガンに、水環境に関心のある個人や団体で構成され、ネットワークを通して、会員それぞれの考えや活動を広く市民や行政などに伝えながら、より良い日田の水環境をつくれるよう活動しています。

環境問題は、1人や2人の努力では決して解決できません。是非、私たちの活動や思いを理解し、「ひた水環境ネットワークセンター」へのご入会をお願い致します。

(個人・団体にかかわらず、入会できます。)

発行：ひた水環境ネットワークセンター

事務局：大分県日田市三本松2-2-16 日田商工会館3F(社)日田青年会議所内

TEL:0973-24-7150 FAX:0973-22-8265

Email: hita-jc@oitaweb.ne.jp



いしたたきは、環境保護の為、再生紙を使用しています。

